

昭和46年度ワラビ防除関係

除草剤試験成績概要

農林省草地試験場草地計画部 野本達郎

昭和46年度ワラビ防除関係除草剤試験成績の一覧表を第1表に示す。また、前年度の検討会は、昭和47年7月7日、長野県下諏訪町山王閣において開催された。昭和46年度成

＜第1表＞ 昭和46年度ワラビ防除関係除草剤試験成績一覧表

薬 剤 名	北農 海道試	四農 国試	九農 州試	熊畜 本牧 種場	滝畜 川試	岩畜 手試	福試支 島沼 畜尻場	枳酪 木試	長畜 野試	島畜 根試	岡和 牛山試	愛農 媛試	高畜 知試
ア ー ジ ラ ン	○		○		△	△	○		○	△	△	○	○
D B N			×	×		△		×			×		
スルファミン酸塩 ・TCBA					×			×					
M C P		×	×		△		△	△		△			
J ー 3 0 0	×	×		×	×	×		×					×
B P A	△			△		×	×	△	○			△	×
MCP・スルファミン酸塩 (MS微粒剤)		×	△		×			×		△			×

註) ○ 効果大, △ 効果あり, × 効果不十分

＜第2表＞ 昭和46年度ワラビ防除関係除草剤審査判定表

薬 剤 名	剤型	有効成分・含有率	薬量/10a	判定	判定理由	継続検討事項	委 託 者
M & B 9 0 5 7 アシュラム アージラン	液	メチル-4-アミノベンゼン スルホニルカーバメイト 37% (40%)	0.5ℓ 1.0 1.5 2.0	実	ワラビの選 択抑制効果 大		塩野義製薬
D B N (カソロン粒剤 6.7)	粒	2,6ジクロロベンズニトリル 6.7%	5Kg 10 15 20	中止	効果不十分		北興化学 クミアイ化学

薬 剤 名	剤型	有効成分・含有率	薬量/10a	判定	判定理由	継続検討事項	委 託 者
スルファミン酸塩+TCBA (イクリンプレメント)	粉	スルファミンサンアンモニウム80%+2,3,6-トリクロル安息香酸(ナトリウム) 7%	7.5Kg 10	中止	効果不十分		保 土 谷 化 学
M C P 乳 剤	乳	2-メチル-4-クロロフェノキシ酢酸ブチルエステル 60%	1 ℓ 1.5 2.0 3.0	継	試験年数不足	散布時期	2,4-D協議会
J - 3 0 0 (タンデックス)	水和	ウレアカーバメイト系 80% (未 公 開)	0.5Kg 1.0	中止	効果不十分		日 産 化 学
B P A (ベスコ)	液	2-メチル-4-クロロフェノキシ酢酸ナトリウム 8.3% 2-メチル-4-クロロフェノキシ酢酸カリウム 1.8% 2,3,6-トリクロル安息香酸ナトリウム 4.9%	0.5ℓ 0.75 1.0 1.5	継	試験年数不足	散布時期 降雨関係	武 田 薬 品
MCP+スルファミン酸塩 (M・S微粒剤)	微粒	2-メチル-4クロロフェノキシ酢酸ブチル スルファミン酸アンモニウム	10Kg 15	継	試験年数不足	散布時期	2,4-D協議会

今までの結果を総括すると、ワラビ防除を中心とするかぎり、アシュラムの効果が卓越し、他薬剤との間に大きな差がある。牧野草地に対する除草剤は、100%の効果を期待するよりも利用管理の方法と組み合わせで、有害草除去の実効をまづ観点に立つものであり、その視点からはなお検討に値する薬剤もある。しかし、ワラビ防除に関する限り、枯殺効果が高くても、その後の発生が抑制されなければ、家畜のワラビ採食による中毒発生につながり、利用管理の組み合わせによる防除が困難な側面がある。したがって、枯殺効果よりも発生抑制効果がより重要な視点となる。上記の立場から、46年度供試薬剤について概観すれば、次のとおりである。

1 アージラン液剤

遅効性であるが、ワラビの発生抑制効果はきわめて高い。北海道、東北高冷地等の寒冷地で効果に安定性を欠く面もあるが、なお、他の薬剤に比べれば効果が顕著である。6～7月の完全展開時、梅雨明け散布がよい。薬量0.5～1.0ℓ/10a、水量70～100ℓ/10a、葉によくかかるよう散布する。寒地では、散布時期、散布精度に十分注意すること。

2 DBM粒剤

散布年の発生は抑制されるが、翌春の発生に

はほとんど効果が認められない。

3 スルファミン酸塩・TCBA（イクリン プレメント）粉剤

ワラビの枯殺効果は著しいが、発生抑制効果は低い。

4 MCP乳剤

枯殺効果、発生抑制効果はともにかなり高いが、アシュラム液剤には及ばない。散布時期について、検討の余地がある。

5 J-300（タンデックス）水和剤

枯殺効果は著しく、発生抑制効果の認められる場合もあるが、牧野草に対する薬害も著しい。

6 BPA（ベスコ）液剤

速効性枯殺効果高く、発生抑制効果もかなり認められ、アシュラム液剤と同等の効果がみられた場合もあったが、効果に安定性を欠く。降雨条件との関係で検討の余地がある。

7 MCP・スルファミン酸アンモニウム （MS）微粒剤

枯殺効果が高く、発生抑制効果が著効を示す場所もあったが、安定性を欠く。

統計編

除草剤使用面積の推移

水田用除草剤

（昭和47年5月25日調べ）

	除 草 剤 名		昭 和 42年度	昭 和 43年度	昭 和 44年度	昭 和 45年度	昭 和 46年度
	一 般 名	商 品 名					
水 稲 生 育 処 理 剤	(1) フェノキシ系		千ha	千ha	千ha	千ha	千ha
	2,4PA(Na)	2,4-Dソーダ塩	80.0	76.0	76.0	65.0	125.6
	2,4PA(アミン)	2,4-Dアミン塩	212.0	221.0	188.6	178.2	146.7
	2,4PA(エステル)水和剤		96.5		162.5	125.2	51.6
	2,4PA粒剤	粒状水中2,4-D	154.4	233.7	232.6	222.2	143.6
	小 計		542.9	530.7	659.7	590.6	467.5
	MCP(Na)	MCPソーダ塩	37.0	39.6	48.6	34.0	30.5
	MCP水和剤	水中MCP水和剤	84.0	79.2	75.5	48.2	43.3
	MCP粒剤	粒状水中MCP	177.3	219.4	247.7	208.0	161.2
	小 計		298.3	338.2	371.8	290.2	235.0
	BPA液剤	ベスコ	9.0	7.5	7.9	7.6	4.5
	MCPB水和剤	水中MCPB水和剤	50.8	1.0	0.8	0.4	0.1
	MCPB粒剤	粒状水中MCPB	28.9	37.9	25.3	20.1	27.8
	フェノチオール粒剤	ゼロワン粒剤				0.1	0.2
	小 計		88.7	46.4	34.0	28.2	32.6